

フッサールの生活世界について

南條 誠

はじめに

フッサールは最晩年の著作『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下『危機』）の中で学問の危機を指摘し、『生活世界』という概念を提示している。この生活世界という概念はフッサールが学問の危機を乗り越えるために提示したキー概念といえる。フッサールのいう学問の危機とそのキー概念となる生活世界を考察することは、『危機』が60年前に書かれたということを考慮に入れても、十分意義のあることと思える。

主題は次のようになる。フッサールのいう学問の危機とはどのようなもので、それはどのようにして生じてきたのか。

またその危機を乗り越えるためのものとして提示された生活世界という概念はどのようなもので、フッサールはそれはどのようにして危機を乗り越えうると考えているのか。

第1章では、フッサールのいう学問の「危機」について、また、フッサールのデカルト批判、カント批判について理解するためにテキストの要約でもってそれを示した（第1節から第4節）。それをおこなったうえでフッサールのいう超越論的主観性を明らかにする（第5節）。（この論文では『危機』の第16節から第24節までをデカルト批判の叙述、第25節から第32節までをカント批判の叙述とさしあたって規定する。）

第2章ではフッサールが「生活世界」を学的対象として

どのような考察をおこなっているかをみる。まずは、なぜ生活世界が学の対象として考察されねばならないとフッサールはしているのか(第6節)。次に、学の対象とされた生活世界が、判断中止によってどのようなものとして考察されるのか(第7節)。最後に、どのような理由によって生活世界は学問の危機を乗り越えたとフッサールは考えているのかを取り出す(第8節)。

この論文の中で「危機」からの引用文を示す際は、「」 \wedge $\$X.s.XV$ と表した。また、要約文の中では参照されている部分の最後に \wedge $\$X.s.XV$ を記した。Xは算用数字。

*この論文は1996年度卒業論文として書かれたものである。本誌掲載にあたり紙面の都合上、第1節から第4節は割愛し、また適時修正、加筆した。

第1章 超越論的主観性の理解

第5節 フッサールの超越論的主観性

こうしてフッサールのデカルト批判、カント批判をみると、デカルトもカントも超越論的主観性と心を明確に区別することをしなかったために、その後十分な哲学しか展開できなかった、とフッサールは考えているといえる。フッサールにしてみれば、判断中止をした以上「心」は括

弧に入れられて現象となるものであり、それは、「エゴの名のもとに包括されている絶対に必当な存在領域」 \wedge $\$17.s.V$ であり「あらゆる存在者とその存在領域に原理的に先行するような存在領域」 \wedge $\$17.s.VI$ である「超越論的主観性」とは明確に区別されるべきものである。

ではなぜそのような区別が明確になされなかったのか。

それはデカルトもカントも客観主義にとらわれていた、もしくは客観主義から脱し得ていなかったからである。デカルトにおいてはガリレイの手で初めてあらわされた「それ自体において実在的に完結した物体界としての自然という理念」 \wedge $\$20.s.VI$ に強く影響されてエゴへの突入をおこなっているし、カントにおいても「その時代の自然主義心理学(略)」によって「 \wedge $\$30.s.II$ 」拘束されていたのである。

それではフッサールのいう正しい超越論的主観性とはどのようなものだろうか。「危機」第17節での叙述はそのままフッサールのいう正しい超越論的主観性である。しかしまた、それは第18節以下のデカルト批判の叙述において「デカルトは……(でき)なかった。」というかたちでもあらわされている。

「判断中止によって世界を喪失した自我(C₀)であるエ

ゴ、すなわちその機能である思考作用においてこそ世界がもちうる限りのそのすべての存在意味をもちうるようなエゴは、世界のうちに、主題として登場するものではないのである、それというのも、世界のうちに一切のもの、従ってまた自己の心的存在、つまり普通の意味での自我もまた、まさにこのエゴの機能からその意味をくみ取ってくるからなのであるが、この点をデカルトは理解しえなかったのである。」(§19, s.83) >

「判断中止において、それ自体で存在するものとして発見されるに至ったエゴは、他の多くの自我を自分の外にもつことができるような『一個の』自我などでは決してないという考えに至らなかったのは当然であった。我と汝、内と外というような、すべての区別は、絶対的エゴのうちではじめて『構成』されるものであるということが彼には覆い隠されていたのである。」(§19, s.84) >

以上の引用文においてエゴとは超越論的主観性のことである。このことは「我々はここでエゴの名のもとに包括されている絶対的に必当然な存在領域をもった」(§17, s.82) > という叙述からも分かる。

また次のような超越論哲学についての叙述の中にもフッサールのいう超越論的主観性があらわれている。

「超越論哲学こそは（中略）あらゆる客観的意味形成と妥当の根源的な場(Grundort)である認識する主観性へと立ち帰り、存在する世界を意味形成体ならびに妥当形成体として理解し、こうして本質的に新たな種類の学問性と哲学とに道を開こうとする哲学なのである。」(§27, s.102) >

従って、フッサールのいう正しい超越論的主観性はつぎのようにいうことができる。

超越論的主観性とは判断中止によって到達する、絶対に必当然的な明証性をもち、わたしにとって考えられうるあらゆる存在者とその存在領域に原理的に先行するような存在領域であり、世界のあらゆる存在意味を成立させる根源的な場である。この根源的明証性こそは哲学が必ずそこから出発しなくてはならないものである。

ここまではフッサールのデカルト批判とカント批判の叙述から導き出される超越論的主観性であって、これだけではフッサールのいう正しい超越論的主観性としては十分ではない。先取りして言うならば、ここに超越論的還元によって得られる超越論的主観性の性格が加えられるべきである。それは次のようである。

超越論的主観性においては世界それ自体も単なる現象となり、それ故そこにおいてこそ世界がどのようなものとし

て妥当しているかを考察することが可能になる。そのさい超越論的主観性は志向性としてとらえられる。

第2章 生活世界

第1章では超越論的主観性が、哲学が必ず立ち帰らなければならぬ根源的な場として示された。超越論的現象学ではそのような根源的な場において考察を進めるのであるが、フッサールはここで「生活世界」が考察されねばならないと主張する。それはどのような理由によつてなのだろうか。この問いに対しては、『危機』がどのような意図において書かれたのかということを考慮に入れれば、それは学問が失った生に対する指導性を取り戻すためであると答えることができる。よつて以下においては、フッサールが生活世界をどのように学の対象として取り上げているのか、そして最終的に、生活世界が学の生に対する指導性を取り戻すのに役割を果たしているのはどのようにしてなのかを考えてみたい。

第6節 学としての生活世界

ここではさしあたって生活世界を、第33節の冒頭を参考にして、「我々がその中で様々に行動したり、思考をしたり

しながら、そこに含まれていることを意識している世界、普段それをあらかじめ与えられているものとして了解し、自明なものとして疑うことをしない世界」としておく。

(要約)生活世界からそのつど目的にそつて必要なものを取り出し利用しながら、諸々の学は構築される(§34, s. 128)。世界の客観真理へ向けられた主観的態度をとつている自然科学者にとつては、この世界は「単に主観的—相対的」という刻印を帯び、この「主観的—相対的なもの」は克服されねばならないとされる(§34, s. 128)。しかし、一方それはあらゆる客観的検証のために理論的—論理的な存在を妥当を究極的に基礎づけるものとして、つまりは明証性の源泉、検証の源泉として機能する(§34, s. 129)。また、客観的理論のいかなる理念形態であろうとも、それらは人間のつくつた形成体であり、結局は生活世界のもつこの具体的統一に属している(§34, s. 134)。すなわち、具体的生活世界は、「学的に真の」世界に対してはそれを基礎づける基盤であるが、それと同時に、生活世界独自の普遍的具体相においては学を包括するものである(§34, s. 134)。

ここに理解しがたい逆説があらわれてくる。それは、単に主観的な相対性を客観的—論理的理論によつて克服した

ように外見上見えるが、この客観的—論理的理論も、人間の理論的実践としては単に主観的—相対的なもののうちにその明証性の根源をもたねばならないという逆説である（§34.7.35V）。この逆説を説明するためには、まず第一に具体的な生活世界が学的に考察されねばならない。

このようにフッサールは生活世界が学的に考察されねばならない理由を述べる。では生活世界はどのように考察されるべきなのか、フッサールは次のように言う。

〔略〕生活世界が現実的に、およびその地平のうちに、人間によつてその共同生活の世界のために獲得された妥当性の基盤をすべて含み、その基盤全体を、抽象的に取り出されるべき世界核心（客観的アプリアリ・引用者注）に究極的に関係させているこの真に具体的な普遍性（生活世界的アプリアリ・引用者注）において、それは考察されねばならないのだ。（§34.8.18V）。

フッサールはまずはこの真に具体的な普遍性である生活世界的アプリアリを考察していくのだが、考察を進めるにつれて新たな課題が持ち上がってきて、そのたびに新たな判断中止が必要となる。

第7節 三つの判断中止と生活世界

『危機』においてあらわれる判断中止は三つある。

- 1) 客観的科学に対する判断中止
- 2) 超越論的判断中止
- 3) 絶対的エゴへの還元のための判断中止

これらの三つの判断中止は無関係なものではなく、生活世界の考察を進めるにつれて、いわば必然的に要請されたものである。これらの判断中止はそれぞれ生活世界に対する性格が異なっている。

ではこれら三つの判断中止はどのようにして要請され、また生活世界をそれぞれどのようにに考察することになるのだろうか。

1) 客観的科学に対する判断中止

この判断中止は最初に必要とされる。近代以降の哲学が客観主義にとらわれていた（カントでさえも経験主義の心の解釈を用いるというかたちで）とフッサールは考えているということは第5節で示した。ならばこの判断中止が最初にくるのは当然であろう。その意味は「一切の客観的科学の認識を共に遂行することを中止するという意味であり、客観的科学の真理とか虚偽とかに関心を持つようなす

べての指導理念に対してさえも態度決定を中止するという意味である。」 \wedge §35, s.138 \vee 。この判断中止によって、すべての主観にとって無条件で妥当する真理、すなわち客観性という目標設定をもつて、「純粹な生活世界を越える一種の仮説」 \wedge §36, s.122 \vee をたてることを予防するのである。

そして「生活世界はそのまっつき相対性のうちにありながらも、普遍的な構造をもっている」 \wedge §36, s.122 \vee ことから、万人に同様に理解されるよう確定することができるとして、その普遍的構造である生活世界的アプリオリを考察することを課題として提起する。よって「生活世界の存在論」という課題が生ずる。しかしここでフッサールは「我々はその問題にかかわっているよりはむしろ、よりはるかに大きな(略)課題、しかも上述した問題(生活世界の存在論・引用者注)自体をも包括するような課題に進むことにしよう。」 \wedge §37, s.145 \vee として以下の考察を進める。

(要約)生活世界は、その世界のうちに目覚めつつ常になんらかの仕方で実践的な関心を抱いている主体としての我々にとって、あらゆる現実のおよび可能的実践の普遍的領野として、地平として、あらかじめ与えられている \wedge §37, s.145 \vee 。しかし世界意識と事物意識つまり対象意識とのあいだには、その意識の仕方において原理的な区別が存する \wedge

§37, s.146 \vee 。それぞれの事物は我々に絶えず地平として意識されている世界³に属する何者か⁴なのである \wedge §37, s.146 \vee 。このような区別を原理的に可能にする形式的枠組みこそ、我々が世界に対し、また世界の中の対象に対して目覚めている様々の様式を可能にしている \wedge §38, s.146 \vee 。

その第一の様式(自然的生活 \wedge §38, s.148 \vee …引用者注)は、そのつど与えられた対象へまっすぐに向かい世界地平のうちへ入り込んでいる様式であり \wedge §38, s.146 \vee 、そのような様式においては、我々の理論的、実践的主题はすべて、常に世界という生活の地平の統一性のうちに存在する \wedge §38, s.146 \vee 。

またこれとは全く異なる目覚めた生き方 \wedge §38, s.147 \vee の様式、すなわち、この世界ないし対象が、様々な主観的な現れ方において意識されている様式がある。この様式への関心の転換においては世界の「先所与性」(Vorgegebenheit)という言葉、すなわち、あらかじめ与えられているその与えられ方という主題を示す言葉が必要となる \wedge §38, s.149 \vee 。そしてこの統一的な理論的関心は、もっぱら主観的なものの領界へ向けられ、その領界の中で、総合的に結合された能作の普遍性によって、世界が我々にとって端的に現存する \wedge §38, s.149 \vee 、その仕方を問う。

このように世界をあらかじめ与える主観性についての普遍的な学問を要請することになる \wedge §38, s.150 \vee と、今までの判断中止、客観的科学を妥当基盤とすることから我々を解き放った判断中止では決して十分ではないということが明らかになる。なぜならこの判断中止を遂行するにあたっては、我々は明らかにまだ依然として、世界の基盤の上に立っているからである \wedge §38, s.150 \vee 。

こうして次の判断中止が必要とされる。客観的科学に対する判断中止においては、生活世界は依然として先取りされているため、生活世界的アプリアリを問う「生活世界の存在論」として考察される。

2) 超越論的判断中止

超越論的判断中止とは「我々がもはや、今までのように自然的に現存する人間として、あらかじめ与えられている世界の恒常的な妥当を遂行することのうちに生きることをやめ、むしろこの妥当の遂行を絶えず差し控えるといった変更」 \wedge §39, s.151 \vee のことである。この超越論的判断中止によって、世界は超越論的現象としての世界に還元され、それと共に世界の相関者である超越論的主観性に還元され

る。そしてこの超越論的判断中止の主眼は、その還元された世界の現象から超越論的主観性の機能を明らかにすることである。

(要約)生活世界の物や対象の主観的の与えられ方の様相に關して問いかけようとすると、そのつどの事物の知覚のうちには、現実化してはいないが、やはり共に働いている現れ方と妥当の総合からなる全体的な「地平」が含蓄されている \wedge §46, s.163 \vee ということが分かる。それなしには一般的にいかなる事物も、いかなる世界をも与えなかったであろうような、現実化していない現れ方の多様性という相關関係アプリアリ(志向性・引用者注)は、地平の展開というかたちで相対的にしか提示されない \wedge §46, s.163 \vee 。そして現実にあてられている全ての存在者は、主観と相關的であり、本質必然性において主観の体系的多様性の指標である \wedge §48, s.169 \vee 。この経験される与えられ方のそれぞれは、この一つの存在者の現れであり、しかもそれぞれの現実的で具体的な経験は、この全体的多様性の中から経験しつつある思考を連続的に充実してゆく過程、すなわち与えられ方の調和的な過程を現実化してゆくわけである \wedge §48, s.169 \vee 。

上述されたことはつまり、存在者がそのような現れ方をすることから主観の機能体系が分かるということであろう。その際「純粹に主観的なものを志向性として、その固有の自己完結的な純粹な連関においてとらえる」〔§49, s.172〕。この超越論的判断中止において生活世界は「現れ方の多様性とその志向的構造へと遡って問う場合の、指標、手引き」〔§50, s.175〕となっているのである。

またここで問題となっているのは、個別的な主観性の志向的能作ではなく、「その能作において共同化された相互主観性の全体」〔§49, s.170〕である。「志向的に主観から主観へと拡がってゆく総合が編み込まれているすべての段階や位層は、総合の普遍的統一を形成し、この統一によって、対象の総体(Universum)「すなわち具體的に、生き生きとしたものとして与えられている世界(略)が成立する。」〔§49, s.170〕

ここにおいて次のような逆説が生じてくる。「あらゆる客観性、すなわちおよそ存在するあらゆるものがそこに解消される普遍的相互主観性は人間以外のなものでもないことは明らかであるし、この人間は疑いもなく、それ自体世界の部分的要素である。世界の部分的要素である人間主観性が、いかにして全世界を構成することになるのか。」〔§53, s.183〕

この逆説を解消するために次の判断中止が必要となってくる。

3) 絶対的エゴへの還元のための判断中止

(要約) 我々の最初の素朴な歩みだしにおいては、我々の関心は対象極とその与えられ方という、最初の反省段階に属する相関関係に、さしあたっては全く固定されていた〔§54, s.185〕。従って、「我々すべて」としての相互主観性がわたしから出発して、わたしの「うち」で構成されるという問題が欠けていたのである〔§54, s.186〕。

直ちに超越論的相互主観性のうちに躍入し、わたしの判断中止のエゴとしての根源的自我を跳び越してしまったその方法的手続きは逆であった。根源的自我がそれ自体として超越論的に人称化しうるということ、また根源的自我がおのれから出発し、おのれのうちに超越論的相互主観性を構成し、しかもおのれを優先的な一員として、この相互主観性のうちに数え入れるということ〔§54, s.186〕、すなわち、エゴとエゴがすべての構成のうちにもっている中心的位置の絶対唯一性に十分な考慮が払われねばならなかった〔§54, s.190〕。

従って、あらゆる構成作用のただ一つの究極の機能中枢である絶対的エゴへ還元することによって、判断中止を意識的に改造する必要がある（§55, s.190）。

以前の判断中止においては超越論的主観性は相互主観的なものとされたために、普遍的な構成の意味能作と妥当能作を遂行する主観としての我々が一体何であるのかが理解されなかった。この主観はすでに我々に人間として妥当しているのにその妥当の仕方を探る手だてが以前の判断中止ではなかったのである。

いまや上のように判断中止は変更されたことによって、生活世界は次のように考察されることになる。

「(略) エゴがその具体的な世界像から出発して問いを体系的に遡らせること、そしてその際、超越論的エゴとしてのおのれ自身を、その具体的な姿において、つまりその構成的な諸層と、言葉に尽くしがたいほど入り組んだ妥当の基礎付けとの体系的性格とに関して、学び取ること。」（§55, s.191）

これは2)超越論的判断中止における生活世界の考察の仕方と同じである。このことから、絶対的エゴへの還元のための判断中止が、超越論的判断中止の中に含まれている、

ないし超越論的判断中止の特異部分であるということができよう。

つまり「危機」に出てくる三つの判断中止において、2)超越論的判断中止と3)絶対的エゴへの還元のための判断中止は性格を同じにし、それら二つは、1)客観的科学に対する判断中止とは一線を画す。2)3)は生活世界を現象に還元し超越論的主観性の志向性の連関の解明のための手引きとするのに対し、1)は生活世界を存在論的に解明することを主題とする。

第8節 学問の危機と生活世界

生活世界が学の生に対する指導性を取り戻すのに役割を果たすのはどうしてなのか。フッサールはこのことについて具体的な箇所をもって答えているわけではないが、私なりに探ってみようと思う。

まずは「生活世界は根源的な明証性の領域である。」（§56, s.190）という記述が注目される。これは客観的世界が思想的構築物であり、原理的に知覚できないのに対して、生活世界は知覚において直接に現前している「それ自体」として経験が可能であることを示している。この明証性こそが超越論的還元になれることができるため、超越論的主

観性において生活世界が考察されるのである。一方客観的世界はこのような明証性をもたないため、判断中止において括弧に入れられてしまう。

また、生活世界がどのようなものであるかという「生活世界の存在論」だけにとどまらず、生活世界がどのようにして我々にとって成立してくるのかという点に関心を向けたことも重要である。なぜならこれによって初めて、生活世界が諸々の要素的な志向性からなる意味形成体として理解されることになるからである。

意味とは妥当様式における意味であるから、志向するものとしての、妥当を遂行するものとしての自我主観に關係している $\wedge \S 9, \text{§} 11 \vee$ 。自我の側でも妥当様式におけるその思考様式をもっている $\wedge \S 48, \text{§} 11 \vee$ ために、その意味形成体としての生活世界を考察していけば、意味を妥当させるわたしである超越論的主観性が理解できるであろう。

最終的に超越論的主観性の解明がされれば、生活世界の意味を与えているのは超越論的主観性であるわたしなのだから、生の意味も解明されるはずである。よって学の生に対する指導性は回復される。その際、生活世界は超越論的主観性を導くキー概念となるのである。

このようにしてフッサールは生活世界が学の生に対する

指導性を回復するのに役割を果たすと考えたのであろう。

おわりに

最初、判断中止はドクサを取り除くための単なる方法的懷疑として理解していたため、それによって得られる明証の根源、検証の源泉が人間の生のとつてのキーポイントになることに気づかなかつた。また、生活世界の考察も客観科学の基礎付けとしてのみ働くものと思い、実存との関わりがよくつかめなかつた。テキストを読み込んでいるときのメモには「(フッサールは)生活世界的アプリアリを超越論的主観性がどのようにとらえられるかを考察することを主張しているのか?」と記されており、そこではまだ、生活世界的アプリアリを実体的に考え、判断中止によつてドクサを排除した超越論的主観性がその生活世界的アプリアリを明証的にとらえることが主題であると考えていたことが伺われる。

生に対する指導性の回復に関してはフッサールの意図を読むことに終始した。わたしの立場を示すこともしなかったが、未だどつちつかずであり、「……のような気がする」という程度の印象しかなく、論証まで到底行き着かないので取り上げなかつた。

この論文のテーマを決めるにあたっては、酒井先生、加藤先生、両先生に大きく影響を受けた。私が3年生のとき両先生の演習をとり、酒井先生の演習ではオイゲン・フインクの『世界と有限性』を読み、その世界概念に興味を持った。加藤先生の演習では「因果関係によらない、部分と全体の関係による認識の仕方」という言葉が印象に残り、現象学に関心が向いた。両先生にはそれぞれ主査、副査になっていただいた。この場を借りて感謝したい。

原典・参考文献リスト

- ・ EDMUND HUSSERL: DIE KRISIS DER EUROPÄISCHEN WISSENSCHAFTEN UND DIE TRANSZENDENTALE PHÄNOMENOLOGIE HUSSERLIANA BAND VI, 1976, HAAG, WALTER BIEMEL
- ・ エドムント・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元 訳（中公文庫）